賢治説「個人の幸福はありえない」再考

森下龍浄

一、「世界が全体……ありえない」に驚きの連続

布教の現場に埋没しない立ち位地を意識しながらここに立ってはいる。現代宗教研究所の大看板に今一度フォーカスした場合、現代にあって（常識・もしくは宗教常識に）埋没せぬ宗教はどのような態様で、その宗教は現代と如何様に切り結ぶ、を研究するところでもあると見た。切り結ぶという時、例えば布教の現場に溢れかえっている賢治の「ありえない」などは「結び」ようがない。賢治像の批判的再評価再構築はできないものか。研究発表とはいうものの、本音は、私の賢治理解はこれでいいのか、という悩みの吐露である。

試みに世界と個人の対比に、乱暴だが小学唱歌を副線に引いてみる。「小さい秋」である。そして奥入瀬で白神山地で白川郷で「秋を満喫しましょう九万九千円の旅」と対比してみる。多忙とか経済的理由で行けなかった人が、家の回りで小さい秋を見つけたとしよう。全体が秋の装いでなければ秋とは言えない？旅行ができない人に「そんなの本物の秋ではないよ」と？幸せをこれほど遠方に措定する。これは叱咤激励に特化した法華経教師向け限定なのか。それにしてもキツすぎる。冷たい。

二、この違和感はどうしても消えない

あのフレーズは気宇壮大のみ。迷妄を一刀両断ならいいが、大幸福と小幸福をこのように截断するのはどうか。大幸福の裾野を形作っている小幸福。

例えば小事だが、詐欺にもあわない日常なども幸福。寺庭の一本の銀杏。小さい秋とは秋のはしりではないのか。ささやかな満足感・ときめきも？小四の書き初め県大会で最優秀賞。本人は幸福である。日本一への道も皆無ではない。それをあり得ないと。我々はよくぞここばかり引用してきたものだと途方に暮れる。大火所焼時から我此土安穏に渡せるのか、「あり得ない」と断言して。

世界から飢えを絶滅できなければ？世界中で戦火が終息せねば？自殺者が一人もいない世界にならねば？富士山八合目あたりでの御来光は本物ではない？

曼荼羅世界につつまれた個人として、歓喜・充実感に浸るのもダメ？賢治と法華経のどちらに従う。

「小さい秋」に幸せを感じる人はそれこそゴマンといるだろう。他を踏みつけての幸福はもちろんダメだが、賢治の脳中には何が？ある人、未亡人になった直後「自分の時間ができた、なんて幸せ」発言も賢治は断罪するか。私はそう思って賢治から一歩身を引く。この未亡人と小さい秋は通底していよう。小さい秋という感動を粉砕無化してはならない。小さい秋に魅せられたら奥入瀬で大感動もできよう。

三、私も法話で取り上げたいのだが

宗教法人無税の特恵を甘受しわが世の春を謳歌している富裕層お上人（と大衆から見られている）が法会で、笑顔で「ありえない」を垂訓のごとく語る。前半の大音に比し後半は微音で。違和感を抱かないのか、大衆は。

今月の聖語・掲示ポスターは何を推奨するのか。「全国の宗徒よ、ここを勉強してください実行してください」のはず。何をどこを勉強。あの文言から何を学ぶ。どのように信行指針に。

ある日の聖語

「現世の安穏ならざる事を投げかざれ」とある。

「世界が全体幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」と。

そして結語は「私たちが生きるべき真の方向性……」である。

「目立つ看板は（も）中身あってこそ」と言われているのに、「あり得ない」の冷たい言葉。違和感だらけ。

各位の後を慕って私も「賢治モノ」を話したい。話したいけどノドに骨が。「ありえない」はどうにも喉ごしが良くない。どなたか、ありえないの次を補足してくださらないものか。説法したいが故のあがき、悩みである。

あの大賢治に噛みつくとは、気が狂ったか。お叱りがあろう。しかし四十年もの疑問疑念が消えないのである。賢治全体像を否定するわけではない。この箇所に限っての疑問である。

四、そこを包み込む架橋は可能なのか

法華経結語は仏身成就。例え幸福を含意しようとも成仏だ。成仏訓導に従うが王道。その先にそれなりの幸福が味わえよう。法華経の第一属性は受持にあるのであって「世界」ではないと思うのだが。

賢治多数のメモ羅列の内あのフレーズのみ？問題はメモを生のまま拡大再生産していったところにあるのだろう。賢治が賢治に言うのはいい。そう理解した上で高座から語りかけているか我々は。賢治自身の覚悟を、高揚の脳内メモを、思索の断片を、どうだとばかりに掲示し続ける。賢治がうちに秘めたる自身の覚悟を語ったものと私は受け止める。スローガンではない。

各々がそれに見習って覚悟を語るのはいい。賢治その人を語るのはいい。だが、幸せ実感先送りで大衆を超長期にわたって「待たせる」のはどうか。ストイックで心優しい賢治が、この冷たさ。どうしたのだろう。

これは、研究成果・提案どころではない。悩み・違和感の羅列である。叱正を乞います。

【発表を終えて】

会場からのご教示に感謝します。疑問の氷解とはなりませんでしたが、受け止め方の違いを学びました。

能登の方々にもやがて平和を実感する日々が来ましょう。だが、「世界が」の言葉を使えましょうか。そこまで待たせたら落胆しかなく、法華経に縁を得ても萎えてしまって遠ざかります。被爆者・いじめ被害者・発展途上国・自死遺族の前でもこの言葉は有効でしょうか。この「劇薬フレーズ」で奮起する猛者がどれほどいるのか。自殺の淵で戦火の街で呻吟する人はその何万倍もいるでしょう。雨にも負けず静かに語るのが似合うようです。

ここは賢治さん思索の跡と読みました。どこかの時点で羽化、その抜け殻がこの言葉。となれば、過去の賢治さんを殊更に言い立てる仕儀となります。この文言について故事来歴を聞かれたならば「賢治さんもそうお考えの瞬間があったのでは」と応じようと思います。「あり得ない」からスタートしてやっとここにたどり着きました。

まずは個人の時々刻々の幸福感を承認するところから「世界が」が視野に入ってくる予感がします。